Osaka University Knowledge Archive

Title	シュルレアリストとしてのル・コルビュジエ ： 《ロンシャン教会》の精神分析的解釈
Author(s)	伊集院, 敬行
Citation	デザイン理論. 2006, 48, p. 66-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53315
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

シュルレアリストとしてのル・コルビュジエ
――《ロンシャン教会》の精神分析的解釈 ――

伊集院敬行／島根大学

機能主義建築を代表する建築家であったコルビュジエ（Le Corbusier, 1887-1965）は，ピュリスムの傑作とされた《サヴォア邸》（1929-31）のあと，《スイス学生館》（1930-32）の頃から次第に機能主義から逸脱するような傾向を見せ始める。戦後この傾向は顕著になりブルータリスム（brutalisme, béton brut が語源）と呼ばれ，コルビュジエが先導していた建築の近代化運動からの後退として多くの信奉者を当惑させた。なぜコルビュジエはこのように造形スタイルを大きく変化させたのだろうか。

一般的には，「たとえブルータリスムの建築が機能主義建築とかけ離れて見えようとも，有機形態のうちには幾何学的な構成が秘められている。よって造形スタイルの変化は後退ではなく発展であって，コルビュジエは自然と幾何学が共存する新たな段階に至ったのだ」という説明がなされる。しかし，この説明は，造形スタイルの変化は後退ではなかったとすることに重点を置くあまり，変化について説明することを回避してしまっている。そこで，彼の建築と密接な関係がある絵画からこの変化について考えてみよう。

コルビュジエの絵画には1920年代の終わり頃から建築に先立ち大きな変化が現れる。それまで日常品といった「典型的オブジェ」を描いた幾何学的なピュリスムの絵画から，石ころや骨や貝殻といった「詩的反応を引き起こすオブジェ」や動物や人間といった有機的な形態が描かれたものになる。

問題となるのは，絵画におけるモチーフやスタイルの変化と，建築におけるピュリスムからブルータリスムへの変化が，トラセ・レギュラトゥール（以下「基準線」）からモデュロールへの変化と結びつけられてしまう場合である。これら基準線とモデュロールは絵画と建築に用いられる補助線の体系である。そしてモデュロールは基準線で扱えなかった自然という非幾何学的形態の中に秩序を見出すことを可能にした。それゆえモデュロールは《ロンシャン教会》（1955-60）のような有機形態を持つブルータリスムの建築を可能にしたものとして，つまり，自然と幾何学の共存のシンボルとして理解され，ブルータリスムは後退ではないということにされる。

しかし，既に見たとおりこの言説は変化の説明にはなっていない。また，基準線とモデュロールが共に黄金比に強い関心を示していても，これらを「発展」という言葉で結ぶことは，慎重であるべきだろう。なぜなら，幾何学図形を参照するときに黄金比とかかわる基準線と，目盛りが等間隔ではなく黄金比で広がっていく寸法体系であるモデュロールとでは黄金比の用いられ方が異なっているからだ。

そこで，「詩的反応を引き起こすオブジェ」という名前に注目してみよう。これは，ブルトンの「ポエム・オブジェ」を連想させるように，シュルレアリスム的である。また，「詩的反応を引き起こすオブジェ」が描かれた絵画には，同時代のシュルレアリスムの絵画と多くの共通点が見られ，その影響が指摘されている。では，ブルータリスムの建築にもシュルレアリスム的なものが見出せるだろうか。ブルータリスムの最高傑作とされる《ロンシャン教会》は有機的な形態をしてい

る。原初の生命を思わせる有機形態（ビオモルフ）は，シュルレアリスムの造形的な特徴の一つである。

また，ル・コルビュジエのシュルレアリスムに対する関心は，彼の著作にも見られる。『今日の装飾芸術』(1925) ではシュルレアリスムに対し否定的ともとれる見解を述べていたのが，のちに精神を病んだ従兄弟の絵画を擁護するエッセイがシュルレアリスムの雑誌『ミノトール9号』(1936) に掲載されるなど，シュルレアリスムに対する態度は一貫せず，その運動には直接関わらなかったが，コルビュジェはシュルレアリスムに対し単なる傍観者ではなかったといえる。

さて，コルビュジェの建築とシュルレアリスムの造形作品を見比べてみると，ジャコメッティのオブジェ《吊り下げられた球》(1930) と《ロンシャン教会》が非常に形が似ていることに気づかされる。ロザリンド・クラウスはこの《吊り下げられた球》を，精神分析用語やバタイユの概念「不定形（informe）」を用いて何度も取り上げて分析する。これらの分析の中でクラウスは《吊り下げられた球》を「機械仕掛け」，「時計」，「性差を破壊する機械」と呼び機械に喩えている。また，クラウスは「グリッド」(1979) という論文において，モンドリアンのグリッド絵画を，精神分析用語を用いて分析する。これら「不定形」，「機械」，「グリッド」はコルビュジェの建築の特徴と一致することから，クラウスの一連の研究は，以下のような応用ができると思われる。

1．《ロンシャン教会》の有機形態を不定形として解釈すること。
2．「住宅は住むための機械である」に代表されるコルビュジェのさまざまなフレーズに見られる機械の語が，単なる機能主義の機械ではない可能性を探ること。
3．ピュリスム時代のグリッドに収まった建築とブルータリスムのグリッドからはみ出るような建築を，モンドリアンのグリッド絵画の相反する特徴である「求心的」と「遠心的」に対応させること。もしくは基準線を「求人的」，モデュロールを「遠心的」として解釈すること。
4．《ロンシャン教会》の壁に穿たれた穴とそこから差し込む光を対象 a として考察すること。

以上の解釈を試みるためには，フロイトはもちろん，1920年代のフランスにおけるフロイト受容としてのブルトン，バタイユ，ラカンが重要になる。そして，この場合のシュルレアリスムとはブルトンのサークルに限定されたものではなく，精神分析理論を基盤にした同時代的動向の中で理解されねばならない。

以上のことから，《ロンシャン教会》の精神分析的解釈を試みることは，ピュリスムとブルータリスムに連続性を見るためではなく，なぜコルビュジェの建築が機能主義に留まることなく新たなスタイルへと変化を遂げたのかを問うための有効な方法だと考えられる。さらにこの試みは，機械時代の芸術としてのモダンアートにおいてシュルレアリスムが果たした役割を再考することにもなるだろう。「私は絵画という運河を通って建築に辿り着いた」というコルビュジェの有名なフレーズはここから理解されねばならない。